

1-6 環境基準が設定されている4物質の経年推移

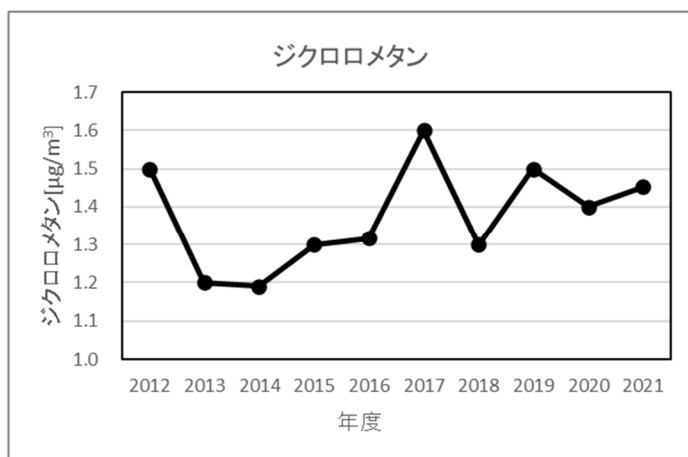
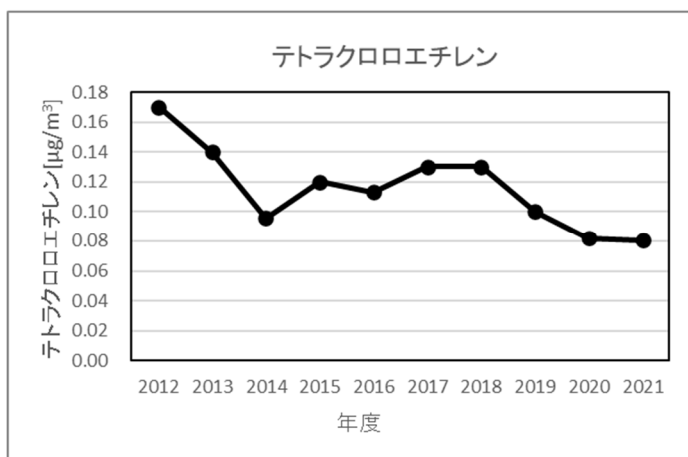
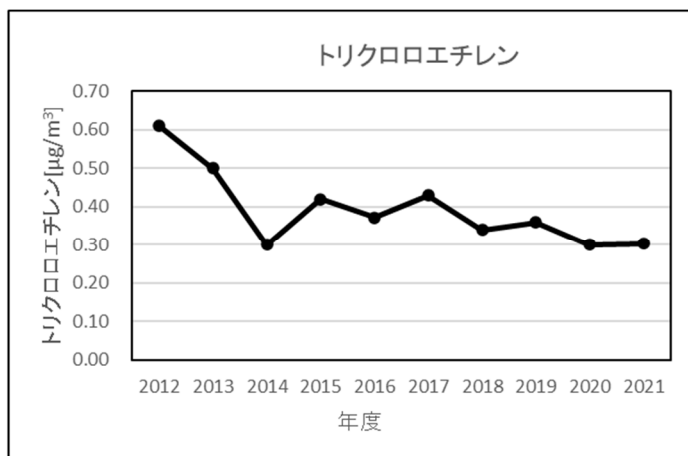
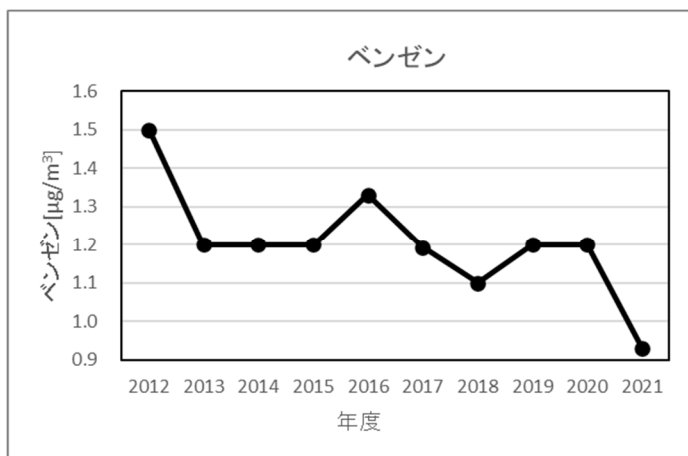
2012年度から2021年度までのベンゼン、トリクロロエチレン、テトラクロロエチレン及びジクロロメタンの全地点平均値について経年推移を示した。

ベンゼン:2012年度において若干濃度が高かったが、それ以外の年度は $0.93\sim 1.3\mu\text{g}/\text{m}^3$ で推移した。

トリクロロエチレン:2014年度にかけて減少したが、2015年度以降は横ばいの傾向を示した。

テトラクロロエチレン:2014年度にかけて減少したが、2015年度以降は横ばい傾向を示した。

ジクロロメタン:2014年度にかけて減少したが、2015年度以降は年度によるばらつきは大きいものの全体的には概ね上昇傾向を示した。



1-7 指針値が設定されている11物質の経年推移

2012年度から2021年度までのアクリロニトリル、塩化ビニルモノマー、水銀及びその化合物、ニッケル及びその化合物、クロロホルム、1,2-ジクロロエタン、1,3-ブタジエン、ヒ素及びその化合物、マンガン及びその化合物、アセトアルデヒド及び塩化メチルの全地点平均値について経年推移を示した。

アクリロニトリル:2012年度をピークに低下傾向を示した。

塩化ビニルモノマー:年度によるばらつきは大きいですが、全体的には概ね横ばい傾向となった。

水銀及びその化合物:2018年度にかけて $1.7\sim 1.9\text{ngHg}/\text{m}^3$ の間で横ばいで推移していたが、2019年度に $2.1\text{ngHg}/\text{m}^3$ に上昇し、2020年度は $1.5\text{ngHg}/\text{m}^3$ に減少、2021年度は横ばい傾向となった。

ニッケル及びその化合物:全体的には概ね減少傾向を示した。

クロロホルム:2019年度にかけて $0.20\sim 0.40\mu\text{g}/\text{m}^3$ の間で概ね横ばいで推移したが、2020年度は $1.0\mu\text{g}/\text{m}^3$ を超えて大きく上昇、2021年度はやや減少した。

1,2-ジクロロエタン:2014年度にかけて減少し、2014年度から2016年度にかけて上昇傾向を示したが、2017年度以降は減少傾向を示した。

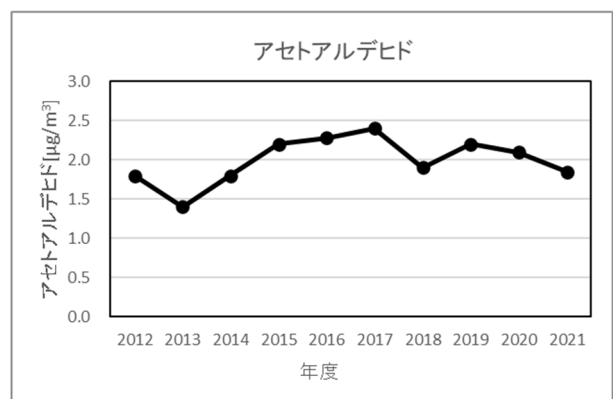
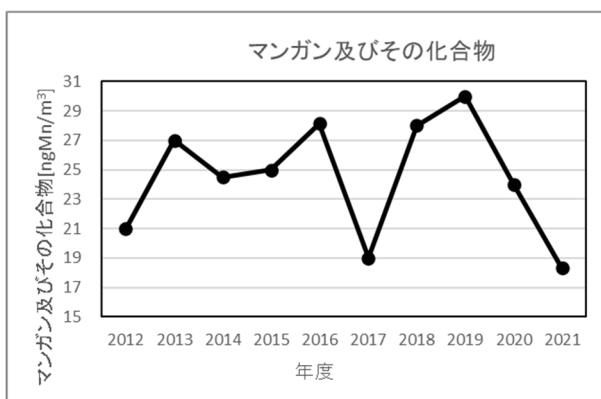
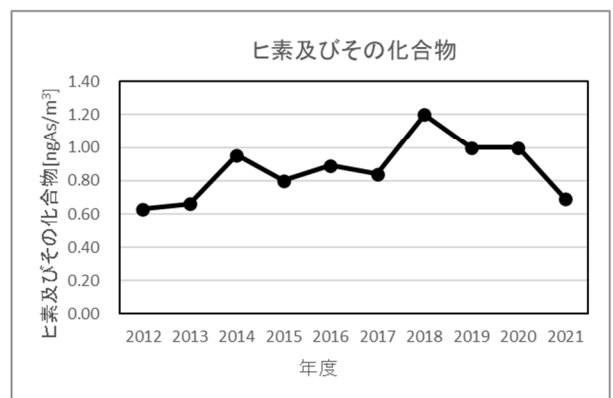
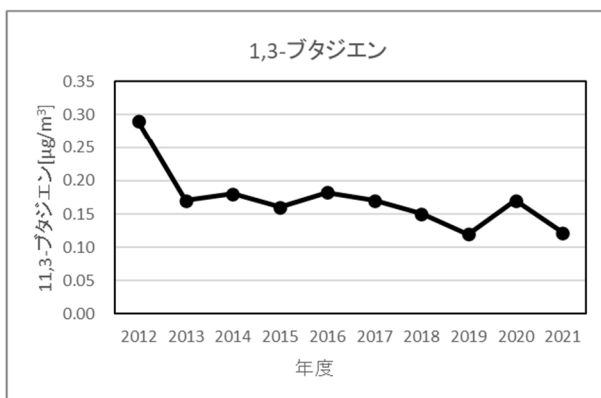
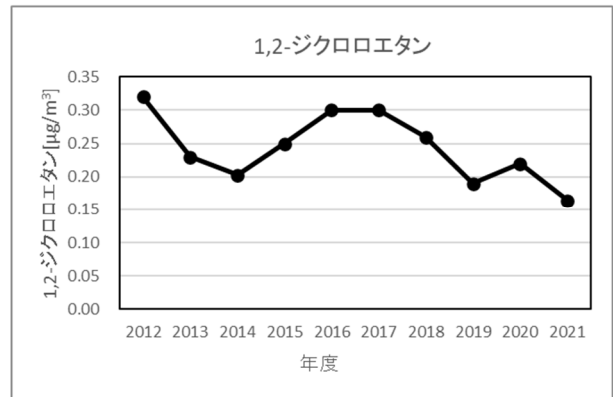
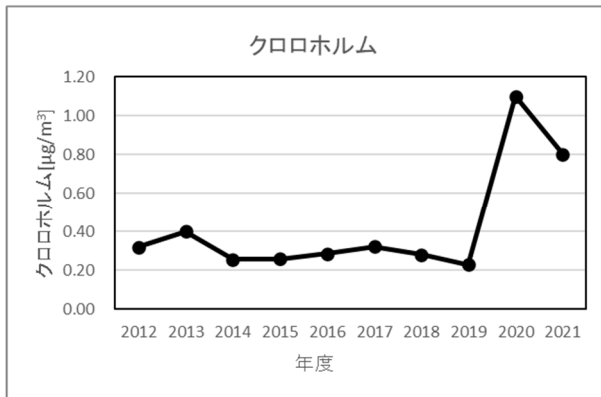
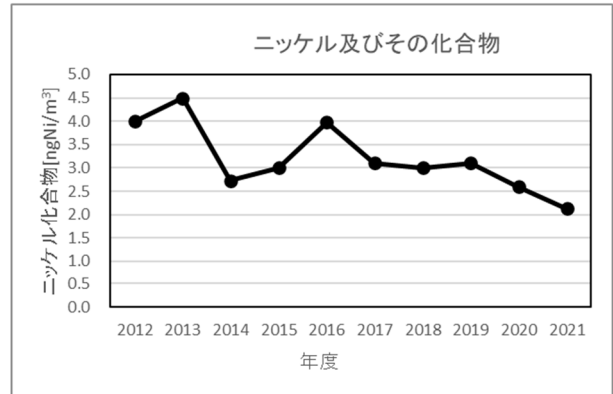
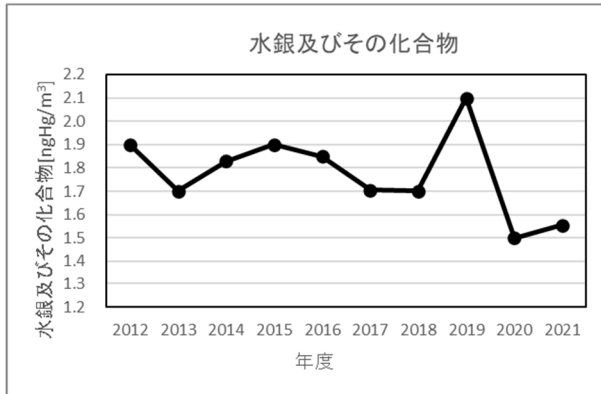
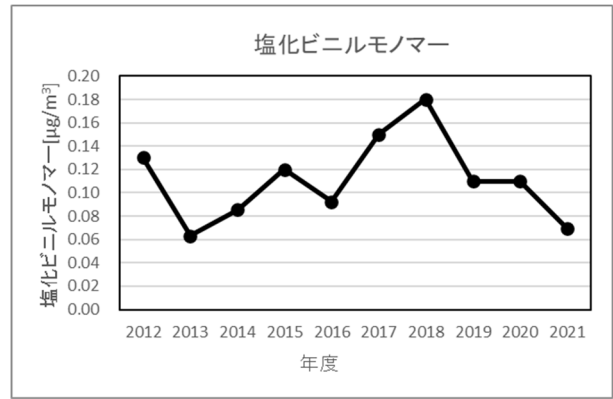
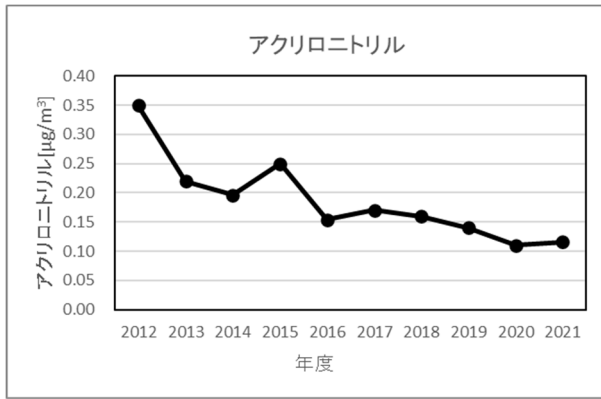
1,3-ブタジエン:2013年度にかけて減少し、その後は概ね横ばい傾向となった。

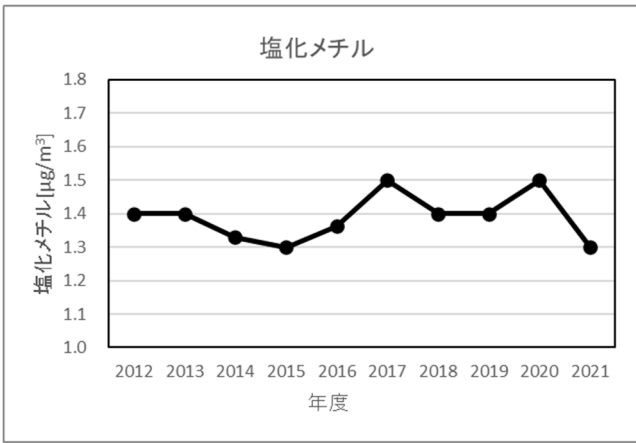
ヒ素及びその化合物:2012年度以降、緩やかな上昇傾向を示し、2018年度をピークに低下傾向を示した。

マンガン及びその化合物:2012年度、2017年度と濃度が大きく減少したほかは、概ね横ばいで推移した。なお、2017年度については濃度の高い千葉市の地点が参考値となったため、値がほかの年度に比べて低い値となった。2020年度以降は減少傾向を示した。

アセトアルデヒド:2013年度にかけて低下し、2014年度以降は横ばい傾向を示した。

塩化メチル:2012年度以降、概ね横ばい傾向にある。





1-8 環境基準及び指針値が設定されていない6物質の経年推移

2012年度から2021年度までの全地点平均値について経年推移を示した。

酸化エチレン：2014年度にピークがあり、その後は減少傾向にある。

ベンゾ[a]ピレン：年度によるばらつきは大きいですが、全体的には横ばい又はやや低下傾向にある。

ホルムアルデヒド：2013年度までは横ばい、2014年度に上昇し、その後は横ばい傾向を示した。

ベリリウム及びその化合物：2014年度、2018年度及び2019年度に大きく上昇する変動を示した。

クロム及びその化合物：2012年度以降、概ね横ばい傾向にある。

トルエン：2012年度以降、緩やかな減少傾向を示した。

